

# 街道沿いにて、縁を折り込む

都市デザイン学分野  
入澤菜々葉

町屋                      商店街                      建て替え  
都市構造                  街道                          均質化

## 1. はじめに

### 1.1 均質化する都市空間

これまでの高度経済成長期をベースとした都市計画・都市デザインにおいては、効率を重視する考えが先行してきた。その一つとして、住宅が商品化し大量生産されたことが挙げられる。マンションや郊外住宅街の一戸建てが住まい空間のスタンダードとして提供され、人々はそれを甘受してきた。本来、暮らしとは地域に根付いたものであり、それによって地域性が形作られ、多様な都市空間が成立していた。それが住宅の商品化によって失われたことが、都市の均質化の一因であると考えられる。大都市近郊には高層建築、郊外には住宅街やロードサイド沿いの大型店舗が集積する様子は想像に容易い。

地方都市のかつての中心市街地におけるシャッター商店街や空き家の増加に象徴されるように、都市の均質化によって、地域に根付いた暮らしを支えてきた町が急速に活力を失っていった。こうした町には、均質化する都市から取り残されたように、過去の面影を感じさせる街並みが見られる。

### 1.2 暮らしと町屋

現在の都市居住では、隣にどんな人が住んでいるのかすらも分からないような、自分の住むための領域を都市から切り取るように断絶したものとなりがちである。

日本特有の都市構造の一つに、人や物の往来が盛んな街道に対して建物が並ぶように町割りを作っていくことで、道に沿うように形成されたものがある。間口が小さく奥行が深いなごの寝床状の敷地と、それに合わせた町屋が特徴で、小さな店が連なって街道沿いの立面に表情を作っていた。このような町には、取り巻く周辺環境が自分の暮らしに作用し、反対に自分の暮らしぶりも都市空間の在り方に作用するような住まい方が存在していたと言える。

しかし町屋では、店を閉じると、外部と関わりを持つためにあった立面は固く閉ざされ、表情のない閉鎖的な街並みへと様変わりしてしまった。

## 2. 対象敷地の状況

宮城県気仙沼市新町は、内湾へと抜ける気仙沼街道沿いに発達した町である<sup>(1)</sup>。古くから宿駅が設けられ人の往来が盛んであった古町と、定期市が開かれた八日町を結ぶ道

沿いに立地し、かつては職住一体の町屋が建ち並ぶ商店街であった<sup>(2)</sup>。しかし、昭和50年代以降、市内の郊外にあたる田中前周辺の新市街地整備やそれに伴うバイパスの開通が進み、市民の購買行動が大きく変化した<sup>(3)(4)</sup>ことにより閉店が相次ぎ、現在はシャッター商店街と化している。東日本大震災における直接の津波被害は受けなかったため、築年数の経過した町屋が現在も残っている。

過去のGoogle mapストリートビューと現在の気仙沼街道沿いの比較を通して、近年では、閉店後の仕舞屋から一般的な戸建て住宅への建て替えや解体が散見されることが分かった。新町では、少しずつ街道に対する景色が変化しつつあり、転換期を迎えていると言える。



図1 設計対象地域



図2 気仙沼街道沿いの町屋の変化

### 3. 目的

閉店後の仕舞屋となっている街道沿いの町屋の建て替えに際して、店空間を持たずとも周辺環境との相互関係の中に暮らしていくことのできる家を提案する。同様の手法での建て替えがこの地域で進んでいくことを見据え、今回の設計対象とした気仙沼市新町に限らず、全国の問題を抱えた町にも適用することができる手法論となることを意図している。

### 4. 設計概要

#### 4.1 1mの隙間

町屋が建ち並ぶことによる連続的な街並みを継承しながら、街道沿いに表情をつくるきっかけとなる空間として、敷地内に1mの隙間を取り込むことを提案する。民法上は、住宅を建てる際には通気等の観点から左右の敷地境界線から50cmの距離をとる必要があり、合計1mの隙間をつくることになる。しかし、町屋が建てこんだ街区においては、隣の外壁が迫る隙間に窓を開けても開放的なものとはならず、十分にその効果を発揮しない。そこで、両者の関係性を反転させ、1mの隙間を敷地の中に設け、ボリュームをできるだけ隣の敷地に寄せて建てる。

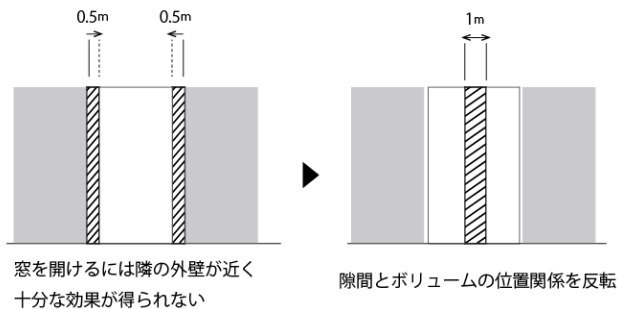


図3 隙間に関する操作ダイヤグラム

#### 4.2 環境との縁を折り込む

現在も住み継がれる町屋では、奥庭や中庭によって通気と採光が確保されてきたが、前面のボリュームによって町とは隔離された家族のための空間であった。本提案における敷地を貫く隙間は、常に町と地続きとなる。また、隙間によって、住まいは二棟に分かれる。二棟は片方で完結せず生活を補完し合う関係とすることで、隙間は住まいの一部でありながら、絶えず町との関係性を取り持つ存在となる。太陽の光や雨粒、地面、風、草花などの自然環境から、街道を走る車の音、散歩する足音、祭りの日の賑わいまで、多様な取り巻く環境を引き入れる。

#### 4.3 新たな風景、人との縁

生活の中で隙間を行き来することで、住まい手の町に対する意識を高め、街道からの見え方を整えられる場として機能する。出窓やテラスなどから垣間見える住まい手の姿や生活の雰囲気は、街道に新たな風景と、人とのゆるやかな関わりしろをつくり出す。

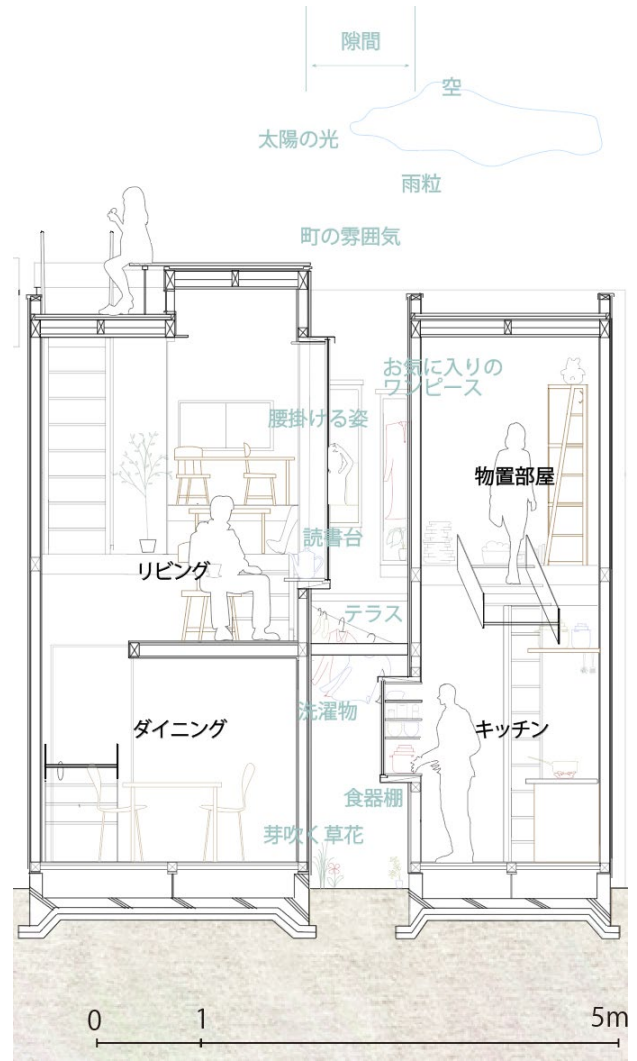


図4 断面図

### 5. 結

隙間と建物の位置関係の反転によって、隙間ににじむ暮らしと入り込む自然環境が、現在の都市居住が失ってしまった周辺環境との相互関係の中にある暮らしをもたらす可能性を示した。本提案における隙間は、町との関係性を取り持ち、街道沿いの立面の表情を作り出す店空間と、外部環境を取り入れる中庭や奥庭の役割を合わせて担うものである。町屋の再編成といえる本提案の建て替え手法は、町の文脈を活かしながら、社会変化に合わせて更新される都市の在り方を示唆している。

#### 【参考文献】

- (1) 気仙沼市編さん委員会(1996),「気仙沼市史 5 産業編上」,pp.301-334
- (2) 気仙沼市編さん委員会(1990),「気仙沼市史 3 近世編」,pp.110-119
- (3) 気仙沼市編さん委員会(1993),「気仙沼市史 4 近代・現代編」,pp.553-561
- (4) 気仙沼市編さん委員会(1993),「気仙沼市史 5 近代・現代編」,pp.340-341